（11 月例会「コレクション紹介」予定より）

昭和 50 年代の趣味週間切手

永吉 秀夫

趣味週間切手は昭和 30 年の「ビードロを吹く娘」以降、輪転グラビア機による多色刷り大型切手（目打穴中心 36 ミリ×51 ミリ）という大型サイズが定着していました。しかし昭和 50 年からはサイズを一回り小さい 33 ミリ×45 ミリに改めた上で、2 種連刷の形態となりました。

この時期の趣味週間切手の収集でポイントとなるのは、連刷のままの使用済(オンカバー含む)でしょう。この時期は第1種定形便料金の2倍と一致する料金がいくつかあって、連刷の形で使用されたものがある程度残されていることが期待されます。

とは言っても、成り行きにまかせていては揃うものではありません。実はここに示した10点のうち7点は、筆者が自分で「作った」ものなのです。全体として消印は良好ですが、「局」が全くわからないもの、「年」が全くわからないものが、1点ずつ含まれています。